

## ■はじめに

校園長先生方、こんにちは。皆様もご存知のとおり、12月2日は「なら教育の日」です。平成10年の12月2日に「古都奈良の文化財」がユネスコ世界遺産委員会で登録されたことを記念して、「なら教育の日」を制定しています。今年は12月19日に集会を開催し、日本料理を世界に広めたことで有名な村田吉弘氏を講師にお呼びしています。ぜひ参加をお願いします。



また、平成14年の12月2日に「奈良教育憲章」を定めました。これには、「奈良は、国際文化観光都市、世界遺産のあるまちです。平城京の昔から、悠久の歴史を経て、今に受け継がれてきた多くの文化財や伝統に大きな誇りを持ち、大切に守り、未来に引き継ぐ責任があります。歴史や文化そして伝統が正しく受け継がれ、さらに新しい文化を創造するには、教育の力が重要です。」とあります。奈良の文化財や歴史に誇りを持ち、大切にします。このことが、奈良市教育ビジョンの根幹であり、理念でもあります。本日は、この奈良市教育憲章の理念を受けて、「春日若宮祭礼（おん祭り）」についてお話したいと思います。

## ■おん祭り



「おん祭り」は、奈良の年中行事の、「祭り納め」といわれる「大祭」です。学校も2時間で終わり、子どもたちを帰らせて参加をしていただくということにもなっています。大名行列保存会には奈良市の子どもたちが50から60人登録していますし、子どもたち自身も参加する奈良の祭りです。私も子どもの頃、祖父や祖母に連れられて行きました。当時はバスが満員で、会場に着いても人でいっぱいでした。木に登って見ている人もたくさんおり、小さな子どもは肩車をしてもらって行列をみているように思います。おん祭りは「大和一国の大祭」といわれ、昔は、学校だけでなく、市役所も半日で終わり、午後からは祭りに参加したり、行列を見たりしていました。今でも奈良市の職員が60人ほど参加をいたします。

おん祭りの基本について、少し触れておきます。おん祭りと深いかわりのある春日大社は、768年に創建されており、本殿4棟が南を向いて並んで建てられました。そこに、現在の茨城県から来られた、武甕槌命（たけみかづちのみこと）が鹿に乗って来られたということから、奈良公園の鹿は「神鹿（しんろく）」、つまり守り神として大切にされてきました。また、平岡神社からご夫婦で来られました神様がおり、このご夫婦の間に生まれた子どもが、若宮様です。若宮様がお生まれになってから本殿の南に新しい社殿が建てられ、

若宮をお遷しし、春日若宮社となりました。その翌年からおん祭りが始まりました。

おん祭りを始めた当時の関白である藤原忠道に仕えていた藤原宗忠が、おん祭りが始まる2年ほど前に記した「中右記」という日記には、「今年風損水損、臨秋末天下大咳病、萬人煩之、可云凶年也（今年は、風害・水害があった。秋になっても、いまだに病気が治まらない。多くの人をわずらわしている。今年は凶年と云うべきだ。）」と書かれており、数年間にわたって同様の記載があります。当時の日記は今と違って公的なものでしたから、不穏な年が続いていたことは、事実のようです。おん祭りという祭礼が行われた目的は、長年にわたる大雨や洪水により相次いだ飢饉や疫病の蔓延を鎮めるためでした。災害や病気に悩まされることなく、安心して暮らせる世の中になってほしい、いわゆる、天下泰平、五穀豊穰、万民安楽を願って、おん祭りは始まりました。

さて、この若宮様が社殿を離れられるのは、12月17日の午前0時から、午後12時までの24時間です。この間、様々な芸能やお供え物によって、平和な世の中や、病気のない平和な暮らしをお祈りします。深夜に若宮様がお出ましされる儀式を「遷幸の儀（せんこうのぎ）」、深夜にお帰りになる儀式を「還幸の儀（かんこうの儀）」といいます。若宮様が1年に1度だけ住まわれる仮住まいは、「お旅所（おたびしょ）」といわれ、ここの正面の中央の芝舞台で若宮様に楽しんでいただくために様々な芸能が演じられます。これが芝居の語源であるとも言われています。この「御旅所祭（おたびしょさい）」で、いろいろな芸能がなされるのですが、これは単なる「神事」としてではなく、「生きた芸能の博物館」であり、文化財として高い価値を持っていると私は思います。また、一の鳥居の内側の南側の壇上に「影向の松（ようごうのみつ）」があります。古来の老松（おいまつ）は枯れてしまいましたので、現在では後継の木が植えられています。お旅所で芸能を奉納する人は、ここを通過するときに、この「影向の松」の下で自らの芸能の一部を演じないと、中に入れないといわれています。



## ■奈良で受け継がれる文化

このように、おん祭りは「大和の国祭り」として、守り伝えられてきました。藤原氏の氏寺であった興福寺と氏神である春日大社の関係で、神仏に守られながらこのような行事がありました。しかし、幕末から明治の初めにかけて、神仏分離という時代の憂き目に遭い、興福寺は大きな影響を受けました。明治3年には、幕府から与えられていた2万1千石の禄が返納となり、このとき、興福寺の多くの僧侶が春日大社の神官に移りました。春日大社もそんなに多くの方は抱えられませんから、だんだんその人たちは京都や東京に出ていきました。よく言われることですが、興福寺の五重塔が250円で売りに出され、買い

手もついたというのが、この頃の出来事なのです。しかし、このような渦中にあっても、おん祭りは途絶えることがなかったのです。「日本の国が平和になりますように、五穀豊穡になりますように」と若宮様に一心に願っていき、そういったものが日本の例祭文化の根本にあると思いますし、そういうものが大事だからこそ、繋いでいこうとする人がいたのだと思います。このことに私は非常に関心を持っております。

また、おん祭りで奉納される能楽は金春流という流派のものです。現在の金春流のシテ方は、奈良市の教育委員をさせていただいている金春穂高氏です。金春・金剛・宝生（ほうしょう）・観世（かんぜ）の各座からなる大和猿楽四座として、大和の国にルーツをもつ能楽の世界ですが、金春穂高氏の祖父である金春栄治郎氏は、宗家であった明治の時代、周りが皆東京に出ていく中、奈良に残り、奈良の伝統を引き継いでこられました。このように、この当時の守るべき芸能を、奈良の地で継承していこうとした人がいたということが大事なのではないかと思えます。

戦後になると、昭和54年に、「春日若宮おん祭の神事芸能」として、おん祭りが国の重要無形民俗文化財に指定されました。その頃、約1000人の人が参画している「春日若宮おん祭保存会」が結成されました。これとは別に約230人が登録している「大名行列保存会」というものもあります。



おん祭りは、1136（保延2）年に初めて行われてから途絶えることなく続き、今年で、879回目を迎えます。いつも申し上げているように、奈良には1000年を超える単位で受け継がれてきた、素晴らしい伝統文化があります。私はいつも「奈良には本物がある」という言葉を使いますが、単に行事の表面的なものばかりを捉えるのではなくて、その行事をどのように受け継いできたのかという中身の部分を知ることが大事ではないかと思えます。

よく奈良と比較される京都においても、例えばおん祭りと同じ平安時代に始まっている京都の祇園祭りは、山や鉦といったきらびやかなものがクローズアップされますが、もともとはおん祭りと同じようにいろいろな芸能がきちんと奉納されていました。このように、華やかな部分が強調され、もともとの原型を保つことができなくなった例が、全国のたくさんの中行事に見られます。ですから、人々がこめてきた思いを大事に引き継ぐという祭礼の原型にあたる部分が、奈良の文化や遺産の特色であると私は思っています。

## ■おわりに

年末は何かと忙しく、懇談等もあり、特に担任の先生方は大変な時期であると思えますが、一年の終わりにある行事にも関心をもち、その中身について咀嚼していただき、子どもたちに伝えていただければと思います。